

---

**ミニトマト 1986 大連**

matsuura

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ミニトマト 1986 大連

### 【Nコード】

N2363T

### 【作者名】

matsura

### 【あらすじ】

1986年2月、作者は、大連賓館で生活をしていた。隣人がお土産のミニトマトを食べた後、消えた。2週間後、窶れた隣人が戻って来た。

2011年5月1日 dNovels 投稿済

さまざまな物語が、歴史のある大連賓館で生まれた。

このミニトマトも、私が住んでいた大連賓館の隣の部屋で生まれた物語りだ。1986年2月、私は大連賓館（旧大和ホテル）の308号室で生活をしていた。

その当時、私の住んでいた大連には、今の大連のように耐震構造の高層ビルと呼べるような建築物が一棟も無かった。私が住んでいた大連賓館（旧大和ホテル）が地震や災害に対して、大連では一番安全な建築物だと云われていた。

大連賓館（旧大和ホテル）は、日本の有名な建築師の太田毅氏、吉田宗太郎氏によって設計され、1909年に建てられたもので、ルネッサンス様式のバロック建築で概観も美しく設備も整っていた。当時、大連で催された主要な宴会は大連賓館が会場だった。大連の一流の調理師が大連賓館に集まっていた。私も大連賓館で催された宴会に何回か出席した。

私の印象に残っている宴会の料理は、飛竜鳥のスープ（今は保護鳥で食べることが出来ない）、熊の手（右手）、駱駝（膝部位の肉）の焼き物の三品だ。

大連賓館の宴会では、日本国内の中華料理店で滅多に食べることの出来ない中華料理が出てくるのが嬉しかった。その反面、私にとって最も苦痛なひとときであった。その原因は中国式の「乾杯（完杯）」だった。

宴会で「乾杯（完杯）」の時は酒を飲み干す、<sup>イッキ</sup>一気飲みしなければならぬ。この瞬間、私は当時の中国の社会体制を実感したような気がした。そして、大連賓館の宴会では悪酔いする人が続出した。もちろん、個人の意思で自由に飲むことができる「乾杯（随意）」もあったが、ほとんどは、「乾杯（完杯）」だった。

乾杯の酒は白酒<sup>バイシユウ</sup>あるいは、ビールの選択であった。赤ワインもあ

つたが、宴会に出ていた当時の中国の赤ワインの味は、妙に甘くてとても飲めるような代物ではなかった。だから、宴会で赤ワインを飲む人はほとんど居なかった。

白酒バイシュウのグラスは小さいがアルコール度数が55度と極端に高く、宴会で茅台酒（白酒・四川省産）を飲むと身体から茅台酒の臭いが二、三日抜けなかった。ビールは、アルコール度数が低い替わりにグラスが大きかったので、すぐにビールでお腹が満腹になって、ビールを飲めなくなった。

鉱泉水は、純度が日本のレベルまで達していなくて、不純物が混じっていて熱しないと飲めなかった。

大連の其の年の冬は寒さが厳しく、夜は隙間風まで身に凍みた。大連の冬は最低気温が零下15度から20度ぐらいだが、雪が降らずに冷たい強い風が吹き乾燥しているので体感温度が非常に低い。大連特有の気候だ。

当時の大連在住の日本人の数は300人前後だった。今は、その100倍の約3万人の日本人が大連に住んでいる。

その当時は解放前で、日本人の住む場所も限られていて、今のよう  
に外国人は自由に生活ができなかった。「銀座ライオンのカレーライス」、「清水の寿司」（今の割烹・清水の前身）を食べるのが楽しみだった。

もちろん、日本からの飛行機の直行便は無く、日本から北京（北京で一泊）経由の便で大連に入った。当時の大連空港は小さく、日本人は、日本人専用の暖かい待合室を設置してくれるように大連市政府に陳情していた。当時大連に住んでいた一部の日本人にはこのような横柄な陳情をしていた人も居た。

タクシーは、大連市内に小型が3台しかなかった。私のように社用車が無い者は、仕事で少し遠くへ外出する時も不便だった。

この「ミニトマト」という話は、私の住んでいた大連賓館の隣の部屋の人の身の上で起こった話だ。

1986年、日本で生活をしていた人にとっては信じ難いような

話だと思う。私も、この話を隣人から聞いた時は信じられなかった。隣人と私は長期滞在者ということもあって仲が良く、気軽に双方の部屋を往来するような間柄だった。そのような親しい隣人が、私の前から、突然、2週間ほど姿を消した。隣人と連絡が取れなくなっただけで私は心配した。

隣人は私より3歳年上の商社マンで、大連では海産物の輸出を担当していた。日本に居た時は、北米の海産物の輸入を担当していたが、鮭の取引で大きな穴をあけて大連に飛ばされて来たのだ。

その当時の大連は何もすることが無く、娯楽というものも一般的にはマージャンぐらいのものだった。マージャンの牌は友誼商場で簡単に手に入った。

労働公園には、中国の国技である卓球台が置いてあった。卓球台はコンクリート製で、この卓球台で打つと玉足が大変早く打ちづらかった。私は、中国の卓球の強さの原点がこのコンクリート製の卓球台にあるような気がした。しかし、このコンクリート製の卓球台も、今は無くなってしまった。

当時、冬になると大連で手に入る野菜や果物の種類が限られた。野菜は、大根、白菜、ジャガイモの三種類だけだった。私は、この三種類の野菜を三種の神器と呼んでいた。果物は、リンゴとミカンのみであった。

冬、南山賓館のレストランへ食事に行っても、メニューは用意してあるのだが、材料が無いので私たちが注文した料理を作ってもらうことが出来なかった。

私たちは、毎日、同じような料理を食べていた。今でも、私の頭の中に残っている料理は「酸辣湯<sup>スワンレータン</sup>」だ。この酸っぱいスープを飲むと当時の大連のことを思い出す。

そんな選択肢の無い限られた生活を続けていた或る日、隣人のところに香港から出張者がお土産のミニトマトを持ってやって来た。ミニトマトは2?ぐらいあった。

隣人は私に、お土産のミニトマトをお裾分けしようと持って来て

くれたが、私はミニトマトが嫌いなのでお裾分けを辞退した。もし、ミニトマトが私の好物で私が食べていたならば、私の身の上にこの不幸が降りかかっていたかもしれないなかつた。

このお土産のミニトマトが、後で、この話の主役になるとは想像もしなかつた。

久しぶりに大好物のミニトマトをもらった隣人は自室へ戻つた。冬場、大連では普段減多に食べることが出来ないミニトマトを食べ始めた。食べ始めると止まらない、あつという間に隣人はミニトマトを完食してしまつた。

その晩、隣人はお腹に激痛が走つて目を覚ました。隣人は我慢が出来ず、トイレに何回も行つた。血色を伴う下痢が出た。明朝になつても、隣人の血色を伴う下痢は止まらず益々激しさを増した。彼はとうとう我慢が出来なくなつて、鉄路（鉄道）病院へ診察に行つた。

この当時の鉄路病院は、日本の病院に比べて医療技術も低く、医療機器や検査機器も不十分だつた。そのため、私たちは、大連で病院へ行くだけでも不安で怖かつた。

診察の結果、隣人の病名は赤痢（赤痢菌により引き起こされ、血便を生じる急性の下痢症）と診断された。

その診断に対して、隣人は、

「ミニトマトの食べ過ぎが原因で、血色の下痢が出ただけだ」と、医者に主張したが無駄だつた。

「赤痢だつたら、日本へ帰つて治療します」と、隣人はその医者に言つた。

「日本へ着くまでに、赤痢が感染する可能性がある。当地で検査・治療してください」と、その医者が隣人に告げた。

その医者は隣人に有無を言わず、即、治療のために感染症の隔離病棟のある病院へ彼を入院させた。彼が隔離病棟に着くまで、制服を着た人が付き添つた。彼は隔離病棟に着くまで不安だつた。

隔離病棟に入院した隣人は、便の細菌培養をされ、抗菌薬を5日間ほど内服させられ、脱水がひどかったので点滴を打たれた。治療後に再度、便培養をして、除菌を確認してから退院を許可された。

隣人が点滴を打たれた時、不安が隣人の頭を過ぎ<sup>よ</sup>った。当時、中国で注射や点滴を受けた多くの外国人が、エイズを発症していたからだ。

「エイズになりたくない」と、隣人は思った。

入院中の隣人の隔離病棟の病院食は、朝から焼き餃子、麻婆豆腐、炒め物と三食とも油っこい中華料理だった。日本の病院では考えられないような内容の油っこい病院食が次から次へと出て来た。その病院食の内容に圧倒された隣人は、隔離病棟の病院食に箸を付けることさえできなかった。

隔離病棟の医者も看護婦も日本語が話せないのも、彼らの説明は全て中国語だった。

中国語の検査結果を見せられても、隣人には内容が分からなかった。そのうえ、入院中は外出禁止、テレビも無く電話も無いので外部と連絡を取ることもできなかった。中国語のラジオを聴いても何も面白くなかった。

当時の大連の電話事情は、ホテルの交換台を通して日本へ国際電話を申し込んでから国際電話が繋がるまでに最短で30分、繋がるまでに8時間以上掛かったこともあった。直通の国際電話は無かった。そのうえ、地元の公安が、外国人の電話を盗聴していた。

隔離病棟から退院して来た隣人は、

「日本では考えられないような世界に連れて行かれて、2週間監禁された。今回の血色の便を伴う下痢は、ミニトマトの食べ過ぎが原因だと幾ら医者にも説明しても聞いて貰えなかった。治療のために日本へも帰らせてもらえなかった。仕方がないので、検査と治療が終わるまで静観していた」

「広い病室に一人で過ごした2週間は、今までに味わったことが無い2週間だった。説明の仕様も無いほどの孤独と恐怖を感じた。そ

して、色々なことを考えた。色々なことを考えれば考えるほど恐怖が増した」

「例えば、この病室で何人の人が死んだのかと言うようなことを考えると、眠れなくて余計に怖くなった」と、隣人は言った。

赤痢でもないのに、ミニトマトの食べ過ぎで入院した隣人は、隔離病棟で今までに味わったことの無いような不安を経験し、恐怖心で精神を押し潰されそうになった。

この出来事が起こった後、彼はトマトと言う名前を聞いただけで嫌気が刺すようになったそうだ。

そして、その年の4月、隣人に東京本社勤務の辞令が下りた。

辞令が下りて、彼の後任者が大連入りした明るる日に隣人は荷物の整理もそこそこで、お土産も買わずに大急ぎで日本へ帰って行った。

たぶん、彼は二度と大連に戻って来ることは無いだろう。

もし、あの時、私がミニトマトを食べていたら、今、私は中国に居ないかもしれない。了



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2363t/>

---

ミニトマト 1986 大連

2011年5月13日19時40分発行